

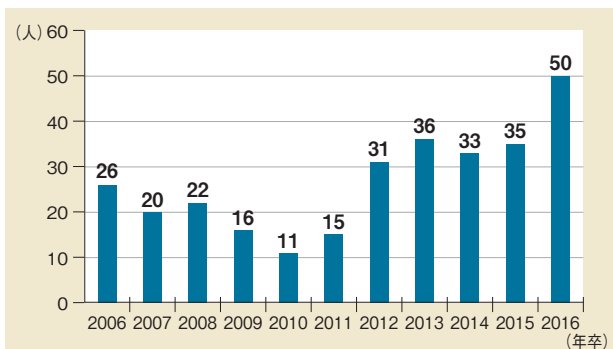
自主自立を尊ぶ校風を再活性させ 進路実績を回復させた“本道”のキャリア教育

毎号1校ずつの高校にご登場いただき、進路指導の取り組みをご紹介します。
第2回目の今回は、ここ数年の間に進路実績をV字回復させている名古屋西高校。
伝統校の精神を活かしながらどのような改革を行ったのか、ご覧ください。

取材・文／永井ミカ

名古屋西高校 (愛知・県立)

■ 現役国公立合格者数の推移



進路指導主事
榎本郁二先生 (中央)
進路指導部
総合学習実行部員
岡野仁美先生 (左)
進路指導部
総合学習実行部員
遠藤啓史先生 (右)



■ 生徒の自主的学習を促し、教員が支援する進路支援システム (最近5年間に設定)

学年共通	4月 10月	進路希望調査	進路志望・学習時間・学習意欲・将来への展望・部活との両立等、進路面・学習面・生活面の取り組みや意識を全生徒に調査。年2回、3年間で5回実施。経年比較・過回比較などの詳しいデータを生徒・教員に提示。面談資料にも活用
1年生	進路テーマ 「本気の『好き』を知る」～自分探し～		
	4月	自主学習冊子「曙」配布	同校独自で作成した英数国の習得すべき基礎事項をまとめた冊子。2年までの実力考査に一定量出題
	4月～翌2月	レコーディング学習帳配布 総合的な学習の時間「360人の主張」	自ら学習習慣をつけるため、教科ごとに日々の学習時間・内容を記録し、自己管理をする 個々の生徒が自らの主張を考え、1年かけて仲間と共に研究、発表していく取り組み。他に自己発見の進路研究も。主体性、協働性、発表力育成を意図したAL型授業
2年生	進路テーマ 「一生の『芯』を育む」～自分を鍛える～		
	6～3月	プラスワン学習	「あと1時間の家庭学習」の確保を呼びかける。支援として希望者を募り、教員作成の実力養成プリント(英数国1日1教科)を3月まで毎日配布
3年生	10月	学部・学科説明会	大学の各分野の講師を招いての説明会。生徒の志望状況に応じ、進路部が交渉、依頼・実施
	進路テーマ 「自分に克つ」～自分と対峙する～		
	4月	進路学習集会	卒業生の進路結果、課題を提示。それぞれの年間(3か月ごと)の学習目標を考えさせる
	6月～	AO等早期受験希望者指導	AO試験希望者全員を進路指導主事が直接面談し、意思確認。対策、合格後の心得などアドバイス
9月	進路学習集会	今後の入試の日程、センター試験の出願指導、各大学の推薦入試に関する説明会など	
12～1月	センター前演習会	期末考査後、冬休み(年末・年始)に希望者に対して実施。3回分の外部のセンター模擬試験を本番通りの時間で校内実施、最終課題を確認	

名古屋西高校は創立100年を超える伝統校。自主性を重んじる、自由闊達な校風が特徴だ。かつては、市内有数の名門校として、年100人前後が国立・公立大学に現役合格していたが、1990年ごろから進路実績に陰りが見え始める。2010年には現役国公立合格者は11人と過去最低となった。

そこで、その翌年度赴任し2年目には進路指導主事に就任した榎本郁二先生は、進路部員と共に進路指導改革に乗り出す。まずは、卒業生の進路データや生徒の志

望・学習状況などすべての情報を教員、生徒に提示して現状を把握してもらい、同校の問題点を共有。生徒の自主的な学習意欲を引き出し、それを教員が支援する流れを作った。一方、単なる進路結果を求めるよりも、自ら歩める人への育成を図って、総合的な学習の時間に、生徒が主体的に考え主張しながら自らの生き方や進路を考えられる取り組みを導入。常に物事の本道を示し続け、生徒の自主性を促すという進路指導で、現役国公立合格者数をV字回復させた。

School Data

1915年創立／普通科
生徒数1114人(男子418人・女子696人)／進路状況(2016年3月実績)／大学進学287人、短大進学15人、専各進学20人、就職1人、その他34人

■ 1年生の総合的な学習の時間 年間計画

導入	4月	自己紹介スピーチ	自分のことを見つめ、考え、そして皆の前で考えを話す、聞く	
		総学委員の選出	「自己紹介」から、皆でふさわしいリーダーを選ぶ	
類型選択支援	4月	進路研究	将来の学びを知り、進路を考える	
	5月	大学人インタビュー	身近で大学を卒業した人を探し、その人の学生生活や大学で学ぶ意義を聞き、まとめる	
		インタビュープレゼンテーション大会	クラス以内で発表し、クラス代表を決定→学年全体の前でプレゼンテーション。360分の1位を全員で決定する	
		社会人講演会	社会で求められる人材について話を聴く	
メイン活動「360人の主張」	5月	「My Opinion」をもつ	13のテーマ、3つの対象を組み合わせ、「こうあるべき」と自分が考える、個人の「仮の自分の主張(初めの主張)」を360人全員がもつ。調査などで考えを深める	
	6月	グループでプレゼンテーション大会→「Team Opinion」を選ぶ→深める→掲示発表	5人1組のグループになり、それぞれが「自分の主張」を発表。相互評価し、5人の発表の中から最も興味のある主張「チームの主張」とリーダーを選択。選ばれた主張を掲示し、自分の希望する主張を選択、チームメンバーの確定。チームメンバーで主張を協議、調査・分析を行うなどして深めていく	
		7月～8月	社会人サポーター訪問	自分たちの主張に助言をいただきたい社会人を探し、生徒自ら訪問のアポイントを取る。生徒だけで訪問し、アドバイスをもらう
	9月	サポーター訪問報告会	クラス内で訪問の内容を報告。皆が「話を聞いてみたい」と思う「招待サポーター」を選び、生徒たちだけで講演依頼を行う	
	10月～11月	ディベート大会	総学委員によるディベートの手本の実施。クラス内ディベート大会の後、クラス対抗ディベート大会を行う	
	12月	サポーター講演会	18人の社会人サポーターを招き、全学年の生徒が希望のサポーターの講演に参加する。事後に感想文、自己評価	
	2月	「Class Opinion」プレゼンテーション大会	クラス代表チームが自由形態(プロジェクター発表、劇など)で主張を発表する	
		「My Opinion」の完成	「こうあるべき」と5月に自分が考えた「自分の主張」を、1年の反省・自己評価を踏まえて完成させる	
	進路研究	1月	「未来を拓く」	文理選択を決定し、総合学習で様々な経験をした後、目指すべき進路を見つける手がかりを探る

総合的な学習の時間

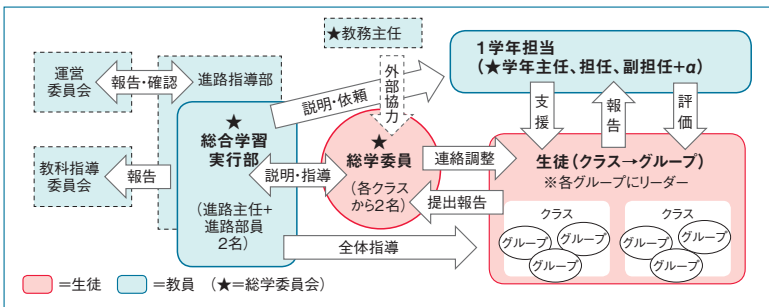
生徒が自分で動く
総合学習「360人の主張」

自主性を育てるため、あえて放任的な姿勢をとっていた同校。しかし現代の生徒たちにはそれが通用しなくなってきた。

「今の生徒は、幸せで恵まれていて実感はあるのに、多くは自分に自信がもてていません」と榎本先生。「そういう生徒が本物の主体性をもつためには、失敗を恐れず自ら臨む経験が必要。その仕掛けとして総合的な学習の時間を活用しました」

1学年の総合学習は1クラス2人の総学委員を中心に、生徒たちが進める。総学委員は最初の自己紹介を基に、じゃんけんなどはせず自分たちでふさわしいと思う人を選出。続く「大学人インタビュー」(下の写真参照)からは、進路主任(榎本先生)・十進路部長(遠藤啓史先生、岡野仁美先生)の計3人の総合学習実行部員が総学委員に授業の内容を簡単に伝え、それをクラスにもち帰って実践していく。例えばグループの分け方、説明の仕方、タイムスケジュール、板書の内容などはすべて各クラスの総学委員に任せられる。

■ 総学委員を中心とする総合学習の運営体制



「すべて生徒任せにできるのは、結果を求めていないから。人と交わる経験が彼らを自然に育ててくれると確信しています。例えば大学を卒業した社会人に話を聞く大学人インタビューでは、あえて知らない人に突撃で取材することに挑戦してもらいます。その経験こそが大事です」と榎本先生。それを各自がもち帰ってクラスの中で発表し意見を言い合う。その中で人を受け入れることも学び、クラスを好きになり、コミュニケーション能力も養われるのだという。

総合学習のうち最も時間を割くメインの活動は「360人の主張」。生徒が自分の「主張」を育てながら社会とつながっていく取り組みだ。最初は生徒一人ひとりが主張を思案する。例えば「中学校の内申制度を見直すべき」「野生動物は尊ばれるべき」「長生きはすべきではない」など自由で多彩な主張が上がる。それをグループ内で発表し、各グループごとに最も共感できる主張を一つ選ぶ。選ばれた人はクラスでプレゼンテーションし自分の主張の賛同者を集め、チームを結成。選ばれた主張「TO(チームオピニオン)」を深めて発信するために、協力してくれる社会人サポーターを見つける。

社会人サポーターに支援要

「すべて生徒任せにできるのは、結果を求めていないから。人と交わる経験が彼らを自然に育ててくれると確信しています。例えば大学を卒業した社会人に話を聞く大学人インタビューでは、あえて知らない人に突撃で取材することに挑戦してもらいます。その経験こそが大事です」と榎本先生。それを各自がもち帰ってクラスの中で発表し意見を言い合う。その中で人を受け入れることも学び、クラスを好きになり、コミュニケーション能力も養われるのだという。



伊藤かこさん(左)と河合 ほんかさん(右)は総学委員の中から選ばれた副委員長。「プレゼンテーション大会の内容は委員長が5分ほど先生から説明を受けたのですが、スムーズに進行できたと思います。真ん中の宇崎友理さんは学年で優勝。「進路を考えるいいきっかけになりました」

学年全体発表

その日のうちに各クラスの代表は体育館のステージで発表。学年の最優秀スピーチを決める。ここでも司会進行は総学委員の役目。



大学人インタビュープレゼンテーション大会の様子



クラス内グループ発表

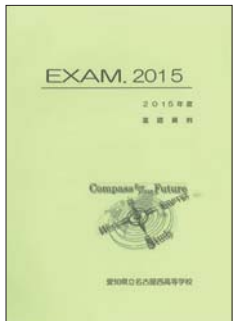
大学を卒業した社会人に、大学についてインタビュー。クラスで10人ずつのグループになり、グループ内で一人ひとりがインタビューで気付いたことや自分の夢をまとめて発表する。グループ内で代表を選び、代表者はクラスでプレゼンテーション。クラスの代表を1人選ぶ。司会などはすべて総学委員が行う。

■ 「360人の主張」社会人サポーターの講演を聴いた生徒の感想(抜粋)

テーマ	教育とはどんなことをすることか
サポーター	京都造形芸術大学 教授 寺脇 研氏
<p>学ぶということがすごく自分の人生を豊かにすることなのだとわかりました。学びは自分で調べ、考えることで新たな自分の知識や能力になります。勉強のような国語や数学といった教科にとらわれず、好きなことや興味のあることから吸収できます。広い視野で周りを見て、気になった物事を見つけたら、積極的に学びを実践していきたいと思いました。</p>	
テーマ	人とロボットのかかわり方
サポーター	安川電機 松本貴博氏、上野智弘氏
<p>参加するまで、ロボットが人間を超えることはないだろうと思っていました。しかし実際は違いました。今の時代、ロボットなくしてはできない仕事もあるため、(中略)、人は人にしかできないこと、ロボットはロボットにしかできないことをやって、共存していく必要があると思います。</p>	
テーマ	さまざまな視点から見る戦争
サポーター	南山大学 教授 小尾 美千代氏
<p>国の中と外が綿密につながっている社会だからこそその良い面と悪い面があることや、国家間の関わりあい方などの国際的な問題について知り、もっとよく考えていきたいと思った。私はより多くのものを知り、学び、自ら考え、人に流されずに行動できるようにしたい。</p>	
テーマ	芸術は評価されるべきなのか
サポーター	名古屋音楽大学 教授 松下雅人氏
<p>技術は評価されるべきだと思います。評価される人が自分の成長をより理解できると思うので必要だと思います。しかし、音楽自体は評価されるのは違うと思います。人それぞれの価値観があり、一概に良い、悪いの評価ができないと思います。</p>	



自主学習の冊子「曙」を作成。生徒が自分のペースで取り組むことのできる工夫をし、全員に配布した。「EXAM」はその年の進路結果をまとめた冊子。卒業生の実力考査の成績と進学実績の相関がわかるように工夫している。



「請のための電話をすることから始まり、断られたら次の候補者を探し、支援を了承してもらえればインタビューをする。そして可能なら学校に招いて講演をしてもらう。こういった交渉をすべて生徒が行うのが特徴で、毎年、大学教授などをはじめ多くのサポーターの講演にこぎつけている。

これらの活動を通して「正しいと思うことを主張することの大切さや、双方向で心通わせることの大切さや、社会とのつながり、まずは伝えることから何かが生まれること、主体性と共感性など多くのことが学べます」と榎本先生。「今の子どもたちが敬遠しがちな風潮にある努力すること、先頭に立つこと、堂々と自己表現することが素晴らしいことであるという」学びの正義を本校での基盤にしたい。それが進路実現に向けた学習にもつながると思っています」

進学のための学習支援

生徒のやる気を掘り起こし 教員が支援する体制

伝統校には強制的な指導はよくないという不文律がある中で、同校では数年前から進学に向けた学習を充実させるために、様々な工夫をしている。

まず、進路部から生徒に過去の詳細な進路データを開示し、多くの先輩が志望校に合格できていない現実を見せた。そして、従来、3年生の補習は学年が内容と人数を設定し生徒募集していたが、生徒に「補習を受けたい教科」を募る方法に変えた。その結果、これまでの3倍の生徒が集まったため、先生に依頼し、希望者全員が受けられるだけの講座を開講。また、2年生までは部活動や行事で補習の時間が取れないため、入学時に自主学習用の冊子「曙」の作成・配布や、2年生では「ブラスワン学習プリント」を希望生徒に毎

日配布。強制ではなく、生徒は主体的に学習することを選び、先生もそれに応えた形がとれたという。

また、家庭学習時間と内容を自ら記録するレコーディング学習帳を活用。同時に進路通信「羅針盤」で、1年生の生徒にも、今3年生が受験に向けて何をしているのかを見せ、2年後の自分を想像するよう促している。

さらに、市内では校内実施が難しい外部模試も、その必要性を説き、結果からの多面的な分析報告・課題提示等の有益さから、教員の理解協力を得て、実施の拡大継続を実現してきた。

「学校のもつカラーを活かして対策をし、成果が出ました。これをまた詳細にデータ化して可視化します。それを見て、生徒も先生もさらにモチベーションが上がる。今は名古屋西高校がいい循環に入ったのだと思います」

名古屋西高校の進路指導のスタンス



榎本郁二先生
教員歴36年、教科は数学。最近では数学のアクティブラーニングの研究・実践にも力を入れている。

正義＝本道を伝えることから進路指導が始まる

生徒の自主性を尊ぶ伝統を再活性させたことが復活の鍵。

「高大接続・A-L型授業と教育の新しい波がおきているが、その本質は、表面上のやり方や結果だけにとらわれず、主体的な行動や仲間との協働の中で生徒が真の理解を獲得し、それを生かせる自信につなげていくことにある」と榎本先生。総合学習や先生の数学の授業でもその精神は生かされている。では、どのようにして主体性を生み出すのか。それは「正義、つまり物事の本道をしっかりと伝え、進むものさしを与えること」と榎本先生。総合学習の初めに生徒には「手を真つ直ぐに上げて自分の意見を述べる生徒が、名西では尊敬される」と伝えられる。同校では今、「主体的に学ぶ」をテーマに全教員による授業研究が進んでいる。放任ではなく「本道の学び」による主体性の育成が芽吹いている。